異世界で最強の装備は、全裸でした

どうか私に全裸を教えてくださいっ！　全裸でなく《世界》だ！

初美陽一

ファンタジア文庫

3019

ISEKAI de SAIKYOU no SOUBIha

C O N T E N T S

プロローグ
004

第一章　偽りの希望たる《姫騎士》、真なる《最強全裸》と邂逅す
006

第二章　至高の《女教皇》、歩むべき〝崇高なる道〟を識る
078

第三章　鉄壁の《不動将》、兜の下の真実を捧げる
132

第四章　束の間の休息、それこそが、〝最強全裸〟にとって最大の戦いだった
177

第五章　《世界》よりも、大切なモノ
206

エピローグ
258

あとがき
269

ZENRA deshita

口絵・本文イラスト　Xe

プロローグ

〝最強の装備〟とは、一体、何だろうか？

例えば、眼前の敵を討ち屠る、強力な武器。
天地を斬り裂く、無双の宝剣。
視界に入る総てを貫く、究極の剛槍。
森羅万象、あらゆる物質を打ち砕く、破壊神の斧。

或いは、どんな攻撃も寄せ付けぬ、頑強な防具。
巨人の一撃さえ受け止める、剛健なる鎧。
竜の炎ですらも無効化する、至宝たる盾。
如何なる事象をも跳ね返す、神々の法衣。

若しくは、それぞれの属性を極めた、神秘の宝具。
存在するもの皆、悉く灰燼と化す、燃え盛る炎の魔杖。
時に守護する清流の如く、時に荒れ狂う濁流の如し、水を支配せし法器。
自由自在に飛び回り、触れるものを気まぐれに斬り裂く、吹き荒れる風の鉤爪。
動かざるは山の如く、一たび動けば破壊の権化、大地を制する武神の兜。

光の神器――解き放たれし閃光は、遥か彼方まで消滅させる。
闇の魔具――何もかも、何もかも、全て呑み込む、闇黒の力。

――いいや、違う。それでもまだ、最強には至らない。
最強、それは始原にして至高、一をして全たらしめる、唯一無二の装備。

真の最強――〝最強の装備〟、それは――！

第一章　偽りの希望たる《姫騎士》、真なる《最強全裸》と邂逅す

青年の名は、ナクト。姓はない、ただの〝ナクト〟だ。
物心つく前から、恐らく生まれた頃から、彼はずっと一人だった。実年齢にして、およそ十八年、〝この地〟で過ごし続けている。
ただ、ナクトの住む〝この地〟は、あまりにも――尋常とは、かけ離れていて。
『――Ｇｒｒｒｒ……』
地の底から響くような唸り声を発するのは、ナクトを見下ろす巨大生物……いや、果たしてそれを〝生物〟と表して、良いのだろうか。
天を覆わんばかりの巨軀、大木のように太い手足。牙は全てを磨り潰す大槌、爪は全てを斬り裂く刃、表皮を隙間なく覆うのは――人類が失伝して久しい、強靱なる金属。
《ダマスカス・ゴーレム》――遥か昔、対敵した重装兵の大隊が、鎧など無きが如く引き裂かれ、傷一つ与えられず全滅してしまった、そんな伝説を体現する怪物だ。
その規格外の化け物を前に、ただ一人の青年に、成す術などなく。

『Ｇｒｒ……Ｗｏｏｏｗ……！』
「……マズイな」
唸り声を漏らすゴーレムを見上げ、ナクトがそう呟くのも、当然。陽光を遮るほど深く生い茂る樹海の中で、巨大樹を背にし、逃げる事も叶わない。
しかもこの強大な化け物を前に、大きなマントを羽織っているナクトの手には、武器の一つもないのだ。
いや、仮に武器を持っていたとして、それが何になるというのか。
今まさに襲い来る、この圧倒的強者を討ち倒すには。
『ＧｕｕｕＯｏｏｏｏｏｏｏＮ‼』
それこそ――〝最強の装備〟でもなければ、不可能――！
「風よ、吹き荒れろ」
『ぐ、ぐおーん!?』
……ナクトが片手を振り上げると、其処にだけ嵐が吹き荒れ、烈風がゴーレムの巨体を周囲の樹々ごと軽々と吹き飛ばしてしまった。

先程の威容はどこへやら、ゴーレムは『ごれむっ、ごれむーっ』と叫びながら逃げ去っていく。それ、ゴーレム的な鳴き声なの？

〝マズイ〟とは、一体何だったのか……いやいや、あれほどの力を発揮したのだ。きっとナクトも、それ相応の代償を支払って――！

「アレは、マズイ……ゴーレムは硬くて、食えるトコがないからな」

味の問題、それだけだったらしい。

ナクトは今まで、ここで――人類不可侵とされる〝危険領域〟で、サバイバル生活を送ってきた。先程のような規格外の怪物に襲われる事も、日常茶飯事である。

大した出来事でもない。何の変化もない、いつもの日常だ――と、踵を返したナクトが住処へ帰還しようとした、その時。

『――……きゃ、ああっ……あっ……！』

「……ん？　今の声は……」

この〝危険領域〟でのサバイバル生活で五感が研ぎ澄まされているのか。まるで《世界》と一体化しているかの如く、獣でも怪物でもない声を、ナクトは正確に捉えた。

間違いない、今のは人間の――女性の悲鳴だ。

けれど、この樹海は深く、あまりにも広大。先程のような怪物が当たり前に跋扈する場所で、たとえ位置が分かったとて、助けに間に合うはずもない。

残念だが、諦めるしかないだろう。それこそが、人類不可侵とされる〝危険領域〟における絶対の掟、弱肉強食、自然の摂理で――！

「よし、飛んでいくか。――《神渡りの風》」

……巻き起こった旋風が、ふわり、ナクトの体を浮かせた直後、一瞬で姿が消える。

そう、この〝風を自在に操る能力〟こそ、この〝危険領域〟において、今までナクトが無事でいられた理由――……

……なのだろうか？

■■■

神風に乗って跳躍し、ナクトが一瞬で辿り着いたのは、樹海の中でも少し開けた場所。

そこにいたのは、幾千年の時を経て生命と邪気を得た大樹の魔物、《世界樹の残渣》。世

界樹の朽ちる事なき生命力により鍛えられた触手は、大斧でも断ち切れぬほど屈強でありながら、大蛇の如く滑らかに動くのだ。

そして、そのローパーの触手を懸命に躱す――一人の少女。

「きゃ、あっ……っ、はあっ！」

ナクトは今まで、ずっと一人で生きてきた。自分以外の人間など、迷い込んでくる者か、無謀な冒険者くらいで、しかも大半が気絶しているか、重傷で意識不明の者ばかり。

中には極まれに、女性の姿もあった。が、それも何年前かの話である。

そもそも、こうして動けている人間をまともに見たのなど、初めて――だが、それでも少女が、絶世の美しさを有する事くらいは、理解できる。

鎧と一体化したかのようなミニスカートのドレスアーマーから覗く、細くしなやかな四肢。その肌は上等の宝石にも負けないほど、白く煌き輝いていた。

長く艶やかな金髪は、回避のため激しく動いても、なおも美しく舞い踊っているようで――その麗しさを文字通り装飾している〝ティアラ〟は、不思議な光を湛えていて。

不意に少女が、ティアラを彩る三つの宝石の右端に、右手を添えると。

「っ――《光剣レディ・ブレイド》――！」

何と、言葉通り〝光〟で形成された剣が、少女の柔らかそうな手の内に収まった。

今までローパーの触手を回避し続けてきた彼女だが、もうやられっぱなしではない。

己より圧倒的に巨大な敵を、怯むことなく見据え、光の刃を真っ直ぐ構える。

「覚悟してくださいっ。――やあああああっ！」

『……！』

気合一声、少女が振るった光剣が鋭く閃いて、ローパーの触手を斬り刻み――！

「やあああ……あうっ」

『？』

……残念ながら斬り刻む事はできず、ぼよんっ、と刃は弾かれ、少女は反動で尻餅をついてしまう。

どうにも気が抜ける結果だが、人類には危険すぎるこの地で、その隙は致命的だ。

「う、うぅ、いたた……あっ。きゃっ……きゃあああっ！」

ついに少女は、ローパーの触手に両腕を絡めとられ、宙吊りにされてしまった。

「く、ううっ……やっ。は、離して、くださ、ぁ……ひんっ⁉」

視覚のないローパーは、ようやく捕らえた獲物を品定めするように、少女の体に触手を這わせている。手足を拘束され、ドレスアーマーの隙間をまさぐられ、その気持ちの悪い感触に、少女は端整な顔を歪めていた。

放っておけば、いずれ触手がその細い首に巻き付き、少女を害するだろう。

それもまた、弱肉強食……だからとて、黙って見過ごす理由もない。

一歩、無造作にナクトが進み出ていくと、触手に拘束されている少女と目が合った。

「ひ、うぅ……え？　……えっ⁉　なぜこんな所に、人が……っ、そ、それよりっ」

少女は驚きながらも、ナクトへ向けて、声をかけようとしてくる。拘束されたままの姿勢で、必死に首を向けてくる少女に、ナクトは安心させようと語りかけた——

「大丈夫だ。ジッとしていろ。すぐに——」

「そこのアナタ——に、逃げてください、ここは危険ですっ！」

「……う、ん？」

——が、少女の口から出てきたのは、助けを求める悲鳴ではない。

むしろ、見知らぬ他人の身を、案じる言葉——声は震えていた、恐怖は感じているだろう。それでも彼女は、ナクトに〝逃げて〟と叫んだのだ。

その事実が、この危険領域で初めて人間と出会った事よりも、ずっと大きな驚きをナクトに与えていた。

だが、大きな声を出した振動のせいか、ローパーの触手が少女の白く細い首を探り当て、巻き付いていく。

魔物の強靱な力で、少女は喉元を締め上げられる、と。

「あっ。……う、うぁ……ひっ、んっ……ッ！」

その端整な顔が恐怖で青ざめ、魔物の無慈悲な触手が、可憐な花を手折らんと力を籠めた——その刹那。

「う。……ふ、え？」

ローパーの触手は斬り刻まれ、少女は既に解放されていた。

何が起こったか分かっていないのか、きょとん、としていた彼女は、今——ナクトの両腕に抱きかかえられている事に気付き、俄かに慌てだす。

「え、あ、あれっ？　……きゃあっ!?　い、いつの間に、っあ、あああの、あののあのっ」
「ん。大丈夫か？　どこか、痛いトコでもあるか？」
「へあっ。あ、こほんっ……へ、平気です！　下ろしてくだ……あっ、後ろ！」
少女が促してくる通り、ローパーの残った触手が、ナクトの背後に迫っていた。
そのまま無防備な背中を、打ちのめされる……かと思いきや。
「きゃっ！　……えっ。ま、また一瞬で、場所が……」
「下ろすのは、ここでイイか？」
「あ、は……はいっ。……??」
ローパーの触手は空を切り、少し離れた場所で、困惑するように右往左往していた。
何が何だか分からない、という表情の少女を、先程頼まれた通り……ただし安全な場所に下ろす。そして改めてナクトはローパーを見据えるが、少女がかけてきた言葉は。
「あ、あの……危ないところを助けて頂き、ありがとうございました。ですが……どうか、逃げてください。あの魔物……あまりにも強すぎます。普通ではありません」
「ん？　そうか？」
「えっ？　あ、はい、見ての通りで……え、っと、こほんっ。ですが先程、私を助けてくれたあなたのスピードなら、きっと逃げきれるはずです」

「ああ。それはまあ、別に逃げられるとは思うけど。じゃあ、また抱えていこうか」
「っ。……心配して、くださっているのですね？　ですが、それは不可能でしょう……あの恐ろしい魔物を相手に、人一人を抱えていては、きっと逃げきれません。……わ、私の事なら、心配いりません。私には――」
気丈な笑みを見せつつ、少女が自身の〝ティアラ〟に手を添え、言い放つ。
「この〝光の神器〟――《光神の姫冠（リアフィト・ティアラ）》がありますから！」
「でもさっき、全く歯が立ってなかったっぽいけど」
「みみ見ていたのですかー!?　いえあのっ、あれはちょっと失敗しただけでっ……つ、次は大丈夫ですからっ！　……だ、大丈夫のはず、ですっ」
少女の言葉尻は小さくなり、しかも震えていて、明らかに虚勢だと分かる。
それでも彼女がナクトを庇（かば）おうとする理由は、そのまま当人の口から告げられた。
「そ、それにっ。見たところ、あなたは……何かの〝装備〟を手にしている訳では、ないようですし。そのマントだけでは、とても戦えないのは……分かっているでしょう？」
「？　……そうなのか？」

「そっ……いえ、そうですよっ。私達人間は、身に着ける〝装備〟を通して、自然界から力を借りられるのです。じょ、常識じゃないですかっ」

外界の常識には疎いナクトだが、なるほど、と少女の言葉に頷く。『装備が力を貸してくれる』という感覚は、ナクトにとっても心当たりがあるのだ。

一方、少女は改めて覚悟を固めたらしく、神妙な表情で呟く。

「さあ……もう逃げてください。そして願わくは、この地から北にある王城へ、言伝を。私の名はレナリア――〝レナリアは最後まで、戦い抜きました〟と。それだけで、伝わるはずですから。……さあ、お早く。私の事は、もう……お気に、なさらず。……っ」

少女の――レナリアの言葉は、やはり虚勢。声も、手足も、震えている。体は竦んで思うように動かないのか、姿勢も中腰の状態で、とても戦う体勢ではない。

それでも〝逃げろ〟と促してくる彼女の前に、ナクトは堂々と立った。

「レナリア。悪いが、それは自分の口から、伝えてくれ」

「……え？　それは、どういう……っ、あ、危ないですよ!?　避けて――」

しつこく襲い来るローパーの触手に、レナリアもまた、何度目かの警告を叫ぶ。

だが、ナクトに焦りはない。レナリアの前に立ったまま、マントの下から手を伸ばし。

「――《灼焔の魔剣（イル・フレア・ブレイド）》」

「……えっ」

右手に形成した、マグマの如き熱波を発する炎の剣で――襲い来る触手を、一瞬にして焼き落とし、炭と化してしまった。

この光景に、レナリアは目を白黒させながら、震える口から辛うじて言葉を紡ぐが。

「あ、ああ、あっ……あなたは、一体、何者……」

「ナクトだ」

「……ふえっ？」

レナリアの言葉に、簡潔に答えたナクトは、改めて自己紹介する。

「俺の名は、ナクト――好きに呼んでくれて構わない、レナリア」

「！　ナク、ト……ナクト、殿っ……は、はいっ、ナクト殿！」

少しは安堵したのか、初めて笑顔を見せてくれたレナリアに、ナクトは続けて言葉を投げかけた。

「レナリア。恐らく、キミの言う通りなんだろう。俺の〝装備〟が、俺に〝最強の力〟を与えてくれる。だからこそ――俺がこの程度の魔物に負けるコトは、ありえない」

「え……えっ!?　ナクト殿は、何か装備を身に着けているのですか？　では……そのマントの下に!?　さ、最強だなんて、一体どのような凄い装備を隠してっ……!?」

レナリアが目を輝かせている間にも、無尽蔵に湧いて出てくる触手を、ナクトは炎の剣で軽々と斬り払いながら言った。

「隠しているつもりなんて、ない。レナリアも、見ているじゃないか」

「見て、いる？　え、っと、私にはマントくらいしか……あっ、まさかそのマントが、ナクト殿の言う〝最強の装備〟ですか!?　確かに何だか、神々しいような……！」

「いや、これはただのマントだ。俺にとってはな。……まだ、分からないか？」

ナクトが問いかけると、レナリアはただでさえ大きく円らな目を皿のようにして、目を離さず観察する――が、やはりナクトの装備の正体は、見えていないらしく。

「う～ん、う～ん、隠していないのに、見えない……な、難解な謎かけでしょうか……そもそも、マントを羽織っているのでは、分かりませんよう……う～ん」

うんうんと悩み続けるレナリアの様子が、ナクトには何だかおかしくて、軽く失笑した――が、ここは人類不可侵の危険領域、風向きは突如として急変する。

「ナクト殿は、一体どんな装備を……え？　……ひっ!?」

呑気とさえ言える様子で悩んでいたレナリアが、短い悲鳴を上げた。

無理もない、彼女の視線の先には、新たなローパーが――深い森の奥から染み出してくるように、何と十数体も現れたのだから。

触手の数を合計してみれば、優に百本は超える。おぞましく蠢く触手達に、レナリアは再び顔を青ざめさせ、柔らかそうな唇を恐怖に震わせた。

「あ、あんな恐ろしい魔物が、こんな、沢山……こんなの、ど、どうすれば……」

「――来る」

「え、な、ナクト殿？　来る、って、それは今、ローパーの大群が……――え」

怯えるレナリアが、ナクトの言葉の真意を知ったのは、この直後。

それはあまりにも、突然に、無慈悲に、飛来した――風を巻き上げ、上空から着地すると同時に、兇悪な獣牙でローパー達を紙屑のように引き裂き、喰い散らす。

《暴牙獣》――危険領域に住まう桁外れの魔物達の、更に上位に君臨する、〝魔物の中の暴君〟。獣毛は一本一本が鉄の硬さ、その下の皮膚は鋼鉄同然。彼の者の暴虐を象徴するのは、大剣の刃を彷彿とさせる、二本の巨大な獣牙。

後から現れたローパーの大群は、この《暴牙獣》から逃げてきたのだろう。結局は、逃げる事も叶わず、触手の一本も残さず引きちぎられてしまったようだが。

ただ、その場に居合わせた人間は、不運でしかなくて。

「あ、ああ、ぁ……やっ――」

『――――!!』

「！　……ぁ……う」

牙を剝き出した《暴牙獣》の、形容できない咆哮は、落雷にも似て――ぺたり、レナリアはその場に、へたり込んでしまう。

もはや抗う気力さえ起きないのだろう、圧倒的な絶望感に俯くレナリアに――けれどナクトは、ナクトだけは、常と変わらぬ平静な声音で、言った。

「レナリア、俺は言ったな。俺の〝装備〟が、俺に〝最強の力〟を与えてくれる、と。まだ分からないのなら――今、はっきりと、見せてやる」

「……え……？　な、ナクト、殿……？」

光を失いかけたレナリアの眼に、微かな輝きが残り、堂々と立つナクトに注目した。

もはや暴虐の牙は、ナクトの目と鼻の先にまで、迫っている。

にも拘らずナクトには、恐怖も動揺も、微塵も見られない。

『――――』

嵐の前の静けさか、しん、と風さえも止み、木々が呼吸を止めると。

ついに《暴牙獣》が、ナクトへと躍りかかっていく――！

『――ボオオオオッ!!』

ローパーの屈強な触手さえ、容易に引きちぎる、暴虐の牙を前に。

ナクトは退きもせず――逆に両手を広げ、マントを大きく開け放ち――！

「世界よ、俺の敵だけを焼き尽くせ――《万象滅炎陣》――！」

それは、天をも焼き尽くす、紅蓮の火柱――踊り、荒れ狂う、灼熱の炎舞。

《暴牙獣》が、ただの一瞬で焼き尽くされ、灰燼と化した――！

それほどの炎を放ちながら、ナクトの制御により、敵対者以外に火の手は及ばない。

後に残ったのは、両手とマントを大きく広げる、ナクトの堂々たる立ち姿のみ。

「う、うそ……あんな、とんでもない怪物を、一瞬で……す、すごい……すごいですっ、ナクト殿！　ああっ、ナクト殿は一体、どんな装備をっ――!?」

そして、ついに明かされた、彼のマントの下を目視した、レナリアは。

「どんな、装、備……をっ？」

「と、まあ、こういうコトだ。分かったか、レナリア。……レナリア」

「……」

レナリアは、大きく目を見開き、完全に硬直し……数秒後。

「……～～……きゅうぅ……」

ぱたり、気を失い、地に横たわってしまった。

そんな彼女を見て、ナクトは心配しながらも、すぐに状況を把握する。

「レナリア……そうか、危機が去って、張り詰めていた気が緩んだんだな。きっと、疲れが一気に出たんだろう。仕方ない、安全な場所へ連れて行くか。よいせ、っと」

「ぁぅっ。ぅ、あぅ……な、ナクト殿の、マントの、下……ぜ、ぜ、ぜ……きゅう～」

ナクトがお姫様だっこしてやると、彼女はよほど疲れているのか、うなされるように声を漏らしていた。一刻も早く介抱してやらねば、とナクトは。

「よし、行くぞ――とうっ！」

ここへ来た時同様、一瞬にして、その場から姿を消した。

――ナクトが実際に見せつけた、桁外れの実力。

そしてレナリアが〝見たまま〟の事実を、言葉にするならば。

ナクトの言う、〝最強〟の――〝最強の装備〟とは――

〝全裸〟――〝全裸〟でした――……

■■■

この〝危険領域〟で採れた木々や岩石によって造り上げられた家は、製作者たるナクト自身が自慢したくなるほど大きく、何より頑強だった。

今までは人どころか、その辺りをうろつく大量の魔物さえ侵入できた事はない。

だが今日に限っては、一人の……それも絶世と呼んで過言ではない美少女が、客として入っている。寝苦しいだろうと、ドレスのアーマー部分はさすがに外して。

「う、うぅ、ん……？　……ここ、は……？」

これまたナクト製作のベッドの上で、不死鳥（フェニックス）の羽で作った毛布（心身を継続的に癒やしてくれて、常にほんのり温かい）を捲（めく）ったのが、その当人。

レナリアが寝ぼけ眼を擦（こす）りながら、ゆっくり、ゆっくりと、上半身を起こすと。

「ふにゃ……ここ、どこでしょぉ……何だかすごく、気持ち良い目覚めでぇ……」

「レナリア、起きたか。具合はどうだ？」

「――ひゃいぃぃっ!?　あっ、なな、ナクト殿!?　あ、ええと、はれっ!?」

「大丈夫そうだな。元気だし。起きられるか？」

「あ、は、はいっ。あれ、なぜ私、眠ってしまって……あっ」

ここへ来る直前、何が起こったのか思い出したのだろう。かっ、と赤らんだ顔を両手で覆ったレナリアが、細い指の隙間からナクトを見ていた。

一方、ナクトは彼女の赤面の意味が良く分かっていないようで、気遣いの声をかける。

羽織っているマントから、ゆっくりと手を伸ばして――

「まだ、体調が優れなかったか？　顔が赤いし、熱があるんじゃ？　どれ――」

「い、いえ、大丈夫で……ってナクト殿、マント！　マントがめくれちゃいますよ!?」

「ああ、安心してくれ。このマントの下は――レナリアが気を失う直前と、同じだぞ」

「ああ、では安心ですね！　……いえちっとも安心ではないのですよ!?　だ、だだだって、そのマントの下って、ぜ、ぜ、ぜっ……あわわ」

「？　おかしな反応だな……俺の〝装備〟くらい、キミだって、常日頃からしょっちゅう見ているだろうに」

「いえ私を何だと思っているのですか!?　あれが初めてですよ、見たのなんてーっ!?」

「そうか……今まで、見ようとしてこなかったのか……それは、気の毒に……」

「なぜか憐れまれていますー!?　み、身持ちが固いんです、私はっ！　別に恋愛経験ゼロだからって、気にしてませんしっ……本当に気にしてませんしーっ!?」

何やら微妙に、話が噛み合っていない気がする、が……レナリアは暫く、顔を真っ赤にしたまま、不思議な弁解を続けていた。

そしてようやく、レナリアが少し落ち着きを取り戻した頃、向かい合って座りながら、改めて自己紹介を交わす。

「こほんっ。では、改めまして。私は、レナリア＝ラ・ティア＝リア・ルーチェ、と申します」

「俺はナクト。姓はない。ただのナクトだ」

「は、はいっ。……それで、もうお気づきかもしれませんが……その、私は」

少し言いにくそうにしていたレナリアだが、覚悟を決めたのか、自身の胸に手を当てながら、正体を明かした。

「私は、人類最大にして最後の砦たる《光の聖城クリスティア》の、第一王女にして。
――《光冠の姫騎士》、レナリアなのです――」

「そうなのか。そこは、どこなんだろう？《姫騎士》って何だ？」

「あの今、私すっごく恥ずかしい子みたいになっていませんか？　お痛ましい感じになっちゃってません？」

せっかく落ち着いたというのに、また顔色が朱に染まりだしたレナリア。しかし今回は持ちこたえたらしく、説明を続けてくれる。

「ええと、《光の聖城クリスティア》は、この地を出てすぐ北にある、大きな城下町の中心にあるお城です。先程の魔物との戦いで、言伝を頼んだ場所の事ですね」

次に、レナリアは右手を自身のティアラにかざし、どことなく誇らしい顔で言った。

「そして《姫騎士》というのは……世界最高の《神器クラス》の装備である《光神の姫冠》に選ばれた者にのみ授けられる、唯一の称号なのです。ふふっ、《神器クラス》の装備に選ばれるのは……ちょっぴり、凄い事なんですよっ♪」

「その割にはさっき、その辺の弱い魔物にも、結構てこずっていたような」

「うぐぅ!?　いえ、よ……弱くなかったですよ！　あんな魔物、この地以外にはいませんしっ……この《神々の死境》のレベルが高すぎるんですっ！」

なるほど、そうなのか、とナクトは納得し、レナリアに感心した声を向ける。

「そっか……ここって《神々の死境》っていうんだな。教えてくれてありがとう」
「いえ超有名な〝危険領域〟なのですよ!?　どうして知らないのですかーっ!?」
「そう言われてもな。俺は多分、生まれた時から、この地で……ずっと一人だったし」
「……えっ？　ずっと……一人、で？」
隠す事でもない、とナクトがあっさり明かした事実は、レナリアに大きな衝撃を与えているようだった。
一方、ナクトは至極マイペースに、己の境遇を説明している。
「たまに迷い込んでくる人間なんかもいたが、良くて瀕死、意識不明の重体だったからな。そういうのは、比較的安全な森の出入り口辺りに運んでやっていた。だから、こうしてまともに話ができた人間は、実はレナリアが初めてなんだ」
「！　そう、でしたか……私が、初めて……」
「ああ。言語や人間社会の常識なんかは、この地……《神々の死境》だったか？　ここの奥地の遺跡や建物に遺された書物があって、それで学んだ。他に人はいないし、充分かまでは確認できないのが難点だけどな。確か、女の子には優しくするモノなんだろう？」
「え、と、それは、人それぞれですが……ふふっ、そんなナクト殿のおかげで、レナリアは、助かりました。……でも、そう……苦労、なさってきたのですね……」

そうでもないんだけどな、とナクトは思うが、レナリアは手の甲で軽く目頭を擦り、潤んだ眼を誤魔化すついでに本棚へ手を伸ばした。
「ふふっ、こういう本で学んだのですね。一体、どんな事が書かれて――……いやあの、読めないのですけれど、コレ。えっ、これなんっ……う、失われた文明の、古代文字？　こっちは……神々の、神字？　えっこれ、えっ、ナクト殿、読めるのですか？」
「まあ時間は腐るほどあったし、他にするコトもないからな……といっても、大して役立つようなコトは書いてないぞ。思想とか、雑学とか、そんなのばかりだ」
「そ、そうなのですか……いえそれでも、歴史学者達が喉から手を伸ばしてでも、欲しがりそうなものですけれど……」
「この世界の真理とか、天の向こうに宇宙というのがあるとか、そんな程度の話だし」
「せかいの、しんり？　うちゅー？」
あまり知らない話だったらしく、きょとん顔が止まらないレナリア。
対してナクトは、彼女と出会ったおかげで得た情報により、腑に落ちた顔をしている。
「でも、なるほどな……レナリアが言っていた、『装備が力を与えてくれる』という言葉。おかげで、その意味がよく分かったよ。《神々の死境》だなんて呼ばれている危険領域で、俺が生きていけるのも……俺の〝装備〟のおかげだったワケだな」

「うちゅ～……はっ⁉　そ、そうっ、そうでしたっ！　結局、ナクト殿は……一体、どんな〝装備〟を身に着けているのですか⁉　あんな桁外れの力、初めて見ましたよ⁉」
「え。いや、だから見せただろう？　レナリアが失神する直前に」
「いえ見たままだと、ぜっ、ぜ……な、何も身に着けていないように見えたのですっ！　気を取られて、見逃したのでしょうけど……と、とにかくっ、一体、どんな装備を⁉」
「見逃しているはず、ないんだけどな。……でもまあ、分かった。至極簡単な話だ。いいか、レナリア」
　固唾を呑んで待つレナリアへと、ナクトは包み隠さず、答えを出した。
「俺が〝装備〟しているのは――《世界》だ」
「なるほど！　……せかい？」
「そうだ。な、簡単だろう？」
　そう、簡単――その簡単な答えに、レナリアは。
「はい、いえ……いえ、分かりません！　《世界》を装備する、って……ぞ、属性は、どうなるのです⁉　装備から引き出せる力は〝五大属性〟……火・水・風・土、そして光の、

五つに基づき……人間はその内、一つの属性からしか、力を得られないはずです！　私のティアラなら、〝光〟というように……《世界》が装備だというなら、一体……」
「皆、一つの属性しか使えないのか？　……それ、不便じゃないか？」
「いえそれが普通なんですってば！　複数の属性を操れるなんて、聞いた事もありませんし……ナクト殿だって、魔物相手に炎の能力を使っていましたし、〝火〟がナクト殿の属性なのではっ……？」
「いや、そんなコトはないぞ。――ほら」
　見せた方が早いか、とナクトが右手の人差し指を立てると、小さな旋風が起こり――ふわり土のコップ（ナクト製）を浮かせ、向かい合う二人の間に一つずつ置かれた。
　それだけでもレナリアは、ぽかん、と小さな口を開いていたが、まだ終わりではない。
　何もない空間に発生させた水を、宙でぐるぐると回しながら、火を灯して熱した。適度に煮立ったところで、先程回収しておいた、炭化したローパーの触手を加える。
　残渣とはいえ、さすがは世界樹の魔物、良質な生薬にもなるのだ。
　レナリアいわく〝ありえない〟、複数の属性をあっさりと行使しつつ、ナクトは自身の能力につけた名を述べる。

「俺が装備している《世界》が、俺に力を借してくれる。
《世界連結（ワールド・リンク）》――火も水も、風も土も――光も、俺の味方だ」

言い終えたのと同じタイミングで出来上がった〝世界樹茶〟が、風に乗って二人のコップに注がれる。レナリアはまだ固まっていたが、ナクトはゆっくりと茶をすすった。
「ズズ。うん……マズイ」
「……ふぁっ!?　な、なな、なんで、どうして……だって一人の人間につき、一つの属性しか扱えない、できない、って……だって、それが決まりでっ……」
目の前で起こった出来事が受け入れがたいのか、目を回す勢いで戸惑うレナリア。
そんな彼女に、けれどナクトは、落ち着いた声を投げかけた。
「扱えない、できない、っていうのは……誰が、決めたんだ？」
「えっ。そ、それは……昔から、決まっていて……実際、できる人なんて、いなくて」
「つまり結局、人間が勝手に決めた物差しだ、というコトだよ。ここまでが限界、これ以上はできない、と。俺達にとって見も知らぬ、昔からの他人達が、な。そんな他人達の決めつけに縛られるなんて、窮屈だろう？」
「！　それは……」

何か思い当たる事でもあるのか、レナリアは沈黙し、俯（うつむ）いてしまう。
そんな彼女へと、ナクトがかける言葉は、包み込むように穏やかで。

「レナリア。《世界》ってそんなに複雑でもないし、意地悪でもないぞ。
できないコトばかりじゃない――《世界》はキミが思うより、素直で、自由なんだ」
「――――!!」

はっ、と勢いよく顔を上げたレナリアが、じっ、とナクトを見つめる。
ナクトの言葉は、レナリアにとってあまりにも常識外れで、信じがたいはずだった。
けれど彼の言葉は、その声は、不思議なほどの説得力を持って――レナリアの心に、すとん、と落ちてゆく。
しばらく、二人はそうして見つめあっていたが、レナリアは粛々と語り始めた。
「……ナクト殿、私の《姫騎士》という称号は……当代において唯一《姫冠》に選ばれた者に授けられる、人類を……そして世界を救う者に、与えられる称号なのです」
「そうなのか。けど……〝世界を救う〟っていうのは、どういう意味だ？」
「はい。当代において、《姫騎士》が必要となる事態――今、世界は滅亡の危機に瀕（ひん）して

いるのです」

世界を危機に陥れる、その原因となる存在の名を、レナリアは口にした。

「魔物、魔族、魔獣、魔竜――あらゆる〝魔〟を集結させた、人類最悪の敵対存在。《魔軍（デモンズウォード）》が――北の最果てから、襲来してきているのです」

元々、真面目な性格なのだろうレナリアの真に迫る言葉は、事態が只事ではない証明で――同時に、沈んだ表情は状況が切迫している事を、言葉より雄弁に示していた。

「だからこそ、私は《魔軍》に抗う《姫騎士》として、人々の希望になる必要がありました。ですが、もうお察しだと思いますが……私に、そんな力はありません。ただ、このティアラに選ばれた……それだけです。私は……〝偽りの希望〟なのです」

どれほどの重責に、苛まれてきたのか。レナリアの表情は晴れぬまま、言葉は続く。

「この《神々の死境》にやってきたのも、神の遺物たる強力な装備を求めての事です。少しでも、《魔軍》に抗う力を得るために。ですが私は、最初に出会った魔物にさえ、歯が立たず……情けなく、怯えるばかりでした。……けれど……でもっ！」

レナリアは、その円らな目に希望の輝きを湛えながら、ナクトに詰め寄り両手を握る。

「私は、あなたに……ナクト殿に、出会いました！《世界》を装備するというのは、話が大きすぎて、まだレナリアには理解できません……ですが、ナクト殿の力なら、きっと《魔軍》とも戦えるはず！　ナクト殿、どうか……どうかっ！」

目を潤ませたレナリアが、最後まで言いきる前に――ナクトは、口を開いた。

「《魔軍》とかいうのが、どれくらい強いのか、よく分からないが――でも、そんな危機を知らされて、この地で黙って滅びを待つ理由もない」

「！　な……ナクト殿！」

「俺が、その《魔軍》とやらと戦おう。当然だ、《世界》が滅ぶなんて――そんなコト」

ぐっ、と握り拳を作ったナクトが、高らかに叫ぶ――！

「《世界》を――俺の唯一の一張羅を、滅ぼさせてなどやるものか――！」

「そ、そういう理由なのですー!?」

何だかズレている気はするが、ナクトはやる気満々らしい。

だが、〝人々の希望〟として懸命に立ってきたレナリアもまた、全てをナクトに託して待っているような、無責任な少女ではなかった。

「ナクト殿。ありがとうございます……けれど、私も力足らずとはいえ《姫騎士》の称号を与えられた女。当然、共に戦います。ただ……ナクト殿にしてみれば、面倒な事かもしれませんが……もう一つ、お願いがあるのです」

お願い、と聞いて首を傾げるナクトを、レナリアは真っ直ぐ見つめる。

「ナクト殿が先程言った、『他人の決めつけに縛られる』というお言葉……身に沁みました。私も今まで、身の丈に合わない〝人類の希望〟という重圧に縛られ、圧し潰されていましたから。……ですが！」

その美しく円らな瞳は、どこまでも真っ直ぐで、強い輝きを秘めていた。

「それでも私は――逃げません！　今の私が〝偽りの希望〟なら、強くなって、その偽りを〝真実〟に変えてみせます！　そのために、どうか、ナクト殿……いいえ！」

ナクトの両手を再び握り、レナリアは頬を紅潮させながら懇願する。

「ナクト師匠――！　どうか私を、レナリアを――弟子にしてくださいっ！」

「……うん？　師匠って、俺か？　弟子、って、そんな――」

「はいっ！　どうか、この不肖の弟子にっ……レナリアにっ――」

ぎゅっ、と握った両手に力を籠め、潤んだ眼に更なる決意を上塗りしながら。

この美しい少女が、容貌同様の美しい声で、目一杯に叫んだのは。

「〝全裸〟を、いえ――〝全裸の世界〟を、ご教授ください――!!」

何とも誤解を招きそうな、どえらい一言が、樹海に響き渡ったのだった――

■■■

レナリアからの弟子入り宣言を受けたナクトだが、その表情は思わしくない。

「う～ん……教えろ、と言われてもな……う～ん」

「な、ナクト師匠っ。無理を承知で、どうか……どうか、お願いしますっ。なんでも……っ、な、なんでも……しますからっ」

なんでもする、という魅惑的な懇願には、レナリアなりの覚悟が見て取れた。とはいえ対人経験の浅いナクトには、その辺りの機微はよく分からず、ただ事実を口にする。

「いや、そもそも、レナリアは勘違いしているぞ――『全裸を教えろ』と言われても、俺は別に全裸じゃない。言ったろ？　俺は《世界》を装備している、と」

「あう。そ、その境地はまだ、良く分からないのですが……では《世界》を装備するには、どうすれば良いのですか……？」

「どう、と言われても……レナリアだって今、ティアラや服を身に着けているだろ？　同じようなモノだよ。服を着るのと、《世界》を身に着けるコト。一体、何が違うんだ？」

「なるほど。なる、ほど……ごめんなさい、高度すぎて、レナリアには分かりません……あっ。じゃ、じゃあっ。ナクト殿はマントを身に着けていますが、それは……？」

言われてナクトは、ああ、とマントを軽くはためかせ（レナリアは慌てて目を逸らしていた）、答えを返す。

「そうだな。俺は多分、生まれてからずっと、この地にいて――《世界》を装備し続けてきた。だが《世界》は大きすぎるのか、普通の服なんかを作って着ようとしてみても、数秒で破裂するんだ。切ないぞ」

「頑張って作ったのに……想像するだけでも、お辛いと思います……」

「ああ。でも、これは割と最近の話なんだけど――《神々の死境》のかなり奥地で手に入れたこのマントは、俺が羽織っても珍しく壊れなかった。それから何となく気に入って、今も身に着けているんだ」

「そうだったのですね……何だか私のティアラのような、《神器クラス》の力がありそうにも感じますが……私は未熟ですし、うん、まあ気のせいですね！」

何だか割と重要な事をスルーした気はするが、まあ気のせい、気のせいなのだろう。

それより当面、レナリアにとって重要だろう事を、ナクトは口にした。

「とにかく、《世界》の装備の仕方といっても、教えようがない。強いて言うなら、そうだな、もう――〝感じろ〟としか言えない」

「!?　か、かかっ……〝感じろ〟、ですかっ……!?　そ、そそ、それって……っ」

「ああ、こういうのは、感覚的なモノだろうし。……？　レナリア、どうかしたのか？」

「は、はいっ、わかりました！　わかりましたけれど……は、恥ずかしいので、そのっ……少しだけ、後ろを向いていて……くれま、せん、かっ……？」

「？　良く分からないが……分かった」

レナリアに促されるまま、ナクトは後ろを向いた。生来、素直な性根の男である。

だがレナリアは、一体何をしているのだろうか。ナクトに聞こえるのは、もぞもぞと身動ぎする音。そして、衣服の生地が、擦れ合うような音。

続けて、ぱさり――床に何か、軽い、何かが、落ちた音がして。

「……な、ナクト、師匠……どうぞ……こちらを、向いて……くださいっ……」

明らかな緊張が伝わってくる、レナリアの声に導かれ、ナクトが振り返ると。

「レナリア、急にどうしたんだ？　一体、何を……――えっ」

そこにいた、レナリアの立ち姿を見て、ナクトは呆気にとられた。

なぜなら、いや、なぜかというべきか、レナリアは――下着姿だったのである。

突然の露出行為に及んだレナリア当人は、その麗しい身を羞恥に焦がしながら、しなやかな両手で肢体の特に重要な凹凸を隠そうとしている。とはいえ、白く細長い腕、小さな手では、儚い抵抗にしか映らないが。

「ナクト、師匠っ……どう、でしょう、かっ……？」

「……どう、と聞かれても」

ナクトは基本、おとぎ話にしか出てこないような怪物に襲われようと、伝説にのみ記される魔物に遭遇しようと、そこまで取り乱す事はない。大体は勝てるからだ。

けれど今、ナクトの心中に渦巻く感情は、それは、恐らく――初めての、戸惑い。

絶世の美少女、と形容されて当然のレナリアの顔つきは、どこか幼気で愛らしい。しかし反面、その肢体は瑞々しい果実のように育っていた。特に胸は、ドレスアーマーを身に着けていた時でさえ、自己主張が激しすぎたほどだ。

幼気と豊熟の危うい均衡は、火照った体と頬に彩りを添え、二つとない妖艶を醸す。それほどの色香を備えながらも、当人は自信なさそうに視線を泳がせていた。

「っ、ご、ごめんなさい、お見苦しくてっ……服も、まだ全ては、脱ぎ捨てる勇気がなくて……し、失望、なさったでしょうか……っ？」

見苦しくもないし、別に失望してもいない。というかそもそも、そんな行為を要求した訳でもない。が、ナクトはそんな言葉も出せなかった。

これが爪牙を剝いて襲ってくる《獣牙王》なら、返り討ちにすれば良い、容易い話だ。けれどレナリアは危険な魔物でもなければ、ナクトの敵でもない。ただ話を聞かないだけの、超絶美少女だ（それが厄介なのだが）。

そんなレナリアに、辛うじてナクトは、言葉を紡ぐ。

「っ……落ち着け、レナリア」

「は、はいっ！　落ち着いて……ナクト師匠に、近づきますね……！」

違う、そうじゃない。どこまでも突っ走る、まっすぐな少女である。困った。

ナクトが再度、止めようとするも――寸刻早く、レナリアは動き始める。一歩、歩みを進めるたびに、肉付きの良い太股は擦れ合い、大事な部分を隠す両手が危うく揺れた。

とうとう目の前に、下着姿のレナリアが辿り着き、至近距離で見つめ合う事になる――かつて塔ほど巨大な《天喰らう大蛇》に睨まれた時でさえ、何も感じなかったというのに（意外とおいしかった、という感想はある）。

今は、どうだろう――無意識に鼓動が速くなるのも、ナクトには初めての体験である。
レナリアの吐く息が胸にかかるほどの至近距離で、彼女が漏らした熱っぽい声は。
「ナクト師匠……レナリアに、レッスンを……全裸レッスンを、お願いします……」
そんなものはない。……ないのだが……ナクトは、一言も発せられなかった。
ただ、ただ、圧倒されていた――人類不可侵の地で、初めて出会った、可憐なる美少女に、その艶姿に、潤んだ眼差しに。
そして、トドメの一言――レナリアが、濡れた唇から紡いだのは。
「レナリアに、《世界》を、〝感じ〟させてくださいっ……ナクト、ししょお……♡」
「――――」
ぽすっ、としなだれかかってくるレナリアの、想像を遥かに超える柔らかさに。
「――ぐっ！　わ、分かった、弟子入りを認めるから……一回落ち着いてくれっ！」
「ふえ？　……な、ナクト師匠っ!?　急によろめいて、どうしたのですかっ!?　……って、えっ？　今、弟子入りを認めてくださると――!?」
超重量級の《アダマンタイト・ゴーレム》の一撃でも微動だにしないナクトが、よろり、

全く別次元の衝撃にふらついた。

むしろ、そうした張本人であるレナリアの方が戸惑いつつも――突飛な行動の影響か、何やら熱に浮かされていて。

「あのナクト師匠を……最強にして最高、人類の真の英雄たる、あのナクト師匠を……よろめかせて、その上、弟子入りを認められるなんて、やっぱり……やっぱりっ！」

いつの間にかレナリアの中で、ナクトが〝真の英雄〟と化していたのは、ともかく。

ある種のトランス状態に陥っているレナリアが、到達した結論とは。

「やっぱり――〝裸〟って、つよいですーっ！」

下着姿で声高らかに、どうもトンデモナイ方向へ、突き進んでいる気がした。

■■■

《神々の死境》――そう呼ばれる〝危険領域〟の出口は、まさに人間世界との境界線。

魔物蔓延る樹海とは大違いで、ほとんど生物の気配は感じない。外界から《神々の死境》へ近づく者はなく、わざわざ住処から出ようという死境の魔物もいないのだろう。

つい近頃《神々の死境》に入った変わり者のレナリアは、何やらウキウキと弾んだ様子で、師と仰ぐナクトへと声をかける。

「さあ！　私とナクト師匠の、冒険の始まりですーっ！　レナリアは、何だか生まれ変わった気分ですっ♪　何だか空気もおいしい気がしますっ♪」

「ああ。《神々の死境》は本来なら人間が生きていられないほど、瘴気が充満しているからな。俺は《世界》に、レナリアはそのティアラに守られていて、平気だったけど」

「そ、そういう意味ではなく～……な、ナクト師匠は、いけずです～っ！」

ぷくっ、と頬を膨らませるレナリアは、何だか《神々の死境》にいた時より、子供っぽい気がする。危険地帯を離れた安堵感のためか、ただ単純に、はしゃいでいるのか。

何となくナクトが微笑ましい気分になっていると、こほん、と咳払いしたレナリアが、人差し指を立ててレクチャーし始める。

「では今から、北にある私の故郷……《光の聖城クリスティア》へ向かいますっ。歩きですし、さすがに数日はかかりますが、途中で宿を取りながら向かいましょう。ふふっ、手配はレナリアにお任せくださいっ♪　何だったら、途中で馬を調達して――」

がんばって先輩風を吹かせるレナリア、だが、初めて《神々の死境》から出たナクトの放った言葉は。

「いや、走っていけば、すぐ着くさ。北に見える、あの大きな城のコトだよな？」
「――へっ？　え、え……み、見えるのですか？　ここからだと、あの……点みたいな所ですよ？」
「ああ、良く見える。《世界》を装備しているんだから、当然だ。さて――よ、っと」
「当然とは一体……きゃっ。……えっ、えっ……えええっ、ナクト師匠っ!?」
呆気に取られていたレナリアが、一転、慌て始める――それもまた当然、ナクトは無造作に、彼女をお姫様だっこしたのだ。
腕の中であたふたとするレナリアが、何か言おうとする、その前にナクトは。
「よし、じゃ、いくぞ。《世界連結（ワールドリンク）》――風よ、俺達を運んでくれ。――よっと！」
「あ、あのあの、ナクト師匠、これ、こっ……――ひゃっ」
ナクトが、割と軽めに、一言を発したのと同時に。
眼前には、城下町へ通じる門――《光の聖城クリスティア》のお膝元に、まさに一足飛びで、情緒などは無視して辿り着いてしまった。
これがナクトとレナリアの、記念すべき冒険の第一歩である。

「……あ、あの、ナクト師匠……あの、ですね……？」
さて、こんな常識外れの移動法を目（ま）の当たりにし、レナリアの漏らした感想は。
「これで二度目ですが……お姫様だっこは……レナリア、恥ずかしいですっ……♡」
気にするのは、そこ――この《姫騎士》、思った以上に大物なのかもしれない。

■■■

「改めまして……ナクト師匠っ。《光の聖城クリスティア》へ、ようこそですーっ♪」
門をくぐって城下町へ入ると、レナリアが両手を広げて歓待してくれる。どうやらまだ、昂（たかぶ）る気持ちは収まらないらしい。
ナクトはといえば、多くの人間たちで賑（にぎ）わう、初めて見る城下町の光景に、率直な感想を口にしていた。
「へえ……すごい賑わいだな。街並みも華やかだし、イイ所だな」
「そ、そうですか？　えへへ、レナリアの故郷を、そう言って頂けるの……何だか、嬉（うれ）しいですっ♪　あっ、街を見るのは初めてでしょうし、せっかくなので案内でも――」

「ああ。街なんて……《神々の死境（デス・トピア）》の奥地の、更に地下の大空洞にあった〝黄金郷〟くらいしか見たコトなかったから、新鮮だよ」

「そう、ですか……そんな……何だか、凄（すご）そうな所……あるんですね……」

何だか物凄く、がっくりと肩を落としているレナリア……だが、ナクトの言葉は、そこで終わらず。

「でも俺は、こうして沢山の人で賑わっていて、どことなく上品な――この街の方が、よっぽど好きだよ。うん、ここは本当に、イイ所だ」

「！　そう、ですか……そうですかっ♪　それなら、えへへっ……良かったですっ♪」

完全に気を取り直したレナリアが、輝く笑顔を見せてくれる。

ナクトの言葉に嘘（うそ）はない。裸の言葉は、率直に相手に届くのだ。

（大体、あんな金ぴかの場所、びっくりするほど落ち着かないしな……人の住む場所じゃない、っていうか。だから滅んだんじゃないか？）

さすが《神々の死境》というだけあって、場所自体にも問題はあったが。

さて、弾んだ足取りでナクトを先導するレナリアだが、町民が彼女を見つけたようで。

「え？　あ、あれ……？　あれ、まさか……《光冠の姫騎士（プリンセス・ナイト・ティアラ）》レナリア様じゃ!?」

その声を皮切りに、ざわめきが波紋のように広がりだし、注目が集まってくる。

「ほ、本当だ……レナリア様だ！　レナリア様がいらっしゃったぞぉぉ！」

「噂（うわさ）では《魔軍（デモン・スウォード）》との戦いに備えて、お城で力を蓄えている、と聞いたけれど……」

「きっと下々の我々を慮（おもんぱか）って、様子を見に来てくださったんだよ！　さすがその優しさで空に虹を架け、笑顔一つで花が咲き乱れる《姫騎士》様だぜワッショォイ！」

「道を、道を開けろォ！　《姫騎士》様の邪魔をするんじゃねッシャオラァァイ！」

何だか、とんでもない騒ぎである。クーデターでも始まるのだろうか。

けれどナクトが、本当に目を丸くしたのは――狂乱する民衆に対する、レナリアの反応だった。特段、彼女は慌てるでもなく、しゃなり、上品に居住まいを正し。

「……ごきげんよう、皆さん」

にこり、微笑みかけると――わっ、と人々は歓声を上げた。

それ以上は何も言わず、民衆の畏敬の眼差しを浴びながら、粛々と歩み直すレナリア。

しかし今、民衆の目にも映っていないかのようなナクトだけが、気付いていた――今しがたレナリアの浮かべた微笑みが、〝偽り〟のものであると。

少し気にかかるナクトだったが、レナリアも察しているのか、彼にだけ聞こえるように語りかけていた。

「大丈夫です、ナクト師匠。私は……決めましたから。この〝偽り〟を、〝真実〟に変え

てみせると。強くなる、と。だから……大丈夫です」

「……ん、分かった。まあ、確かに大丈夫だ。俺が、ちゃんと分かっているから、な」

「っ。……はい……はいっ、ナクト師匠っ♪」

今、彼女が見せた笑顔は、本物――まだ付き合いの短いナクトでも、他の誰よりも、ちゃんと分かっていた。

と、レナリアは歩きながら、今度こそとナクトにレクチャーする。

「こほんっ。ところで、ナクト師匠は確か……〝装備のランク〟について、ご存じありませんでしたよね？」

「ん。ああ、そうだな。レナリアのティアラが最高の《神器クラス》とは聞いたけど……何しろ《神々の死境》には、俺以外に人間がいなかったし」

「ではっ。不肖、このレナリアが……僭越ながら、教えちゃいますっ♪」

キリッ、と腰に手を当てながら、茶目っ気たっぷりのウインクを送ってくるレナリアが、立てた人差し指を、少し離れた畑作業中の町民へと向ける。

「まず、一番下――〝ランク1〟に該当するのが《一般クラス》です。どれだけ習熟しようと、基本的に攻撃性能と呼べるほどの力は得られませんが、開墾や建築作業、日常生活には充分なレベルです。ほら、例えばあの方が持っている、鍬のように――」

「え。……はうあっ!?　《姫騎士》様が、この鍬を指さしてらっしゃるうぅぅ!?　即ち《一般クラス》の鍬でさえ、《姫騎士》様の御威光にさらされたことにより格式高くなるのは必然ン！　もはやこの鍬は、〝ランク2〟……《兵装クラス》じゃアアアい！」

「……」

そんな効能はない、と言いたげなレナリアだが、きゅっ、と柔らかそうな唇を噛んだ後、改めてナクトに説明を続けた。

「へ……《兵装クラス》の話が出ましたね！　〝ランク2〟ともなれば、攻撃的な能力を発揮できるようになります。〝習熟度〟を限界まで高めたマスターレベルは、ゴーレムさえ一刀で斬り伏せるとか……ただお値段が張ってくるらしく、国が所属兵や傭兵に支給するのが、一般的なようですけれどね。たとえば、ええと……あっ、あの辺りの――」

「!?　れれレナリア様がこちらに目をォ!?　まずい、こんなクソみてぇな《兵装クラス》の槍や鎧なんざ見せたら、あの貴き眼を汚しちまうぞォォ！」

「脱げ脱げ！　脱ッ……ああもう！　こんなもん放り捨てちまえェェ」

「オラァァァ！　地の果てまで飛んでいけェ！　ンオラァァァイ！」

「……」

支給されたものだろうに、良いのだろうか。ナクトが何とも言えず黙っていると、レナ

リアは行き場をなくした指を、ふるふると震わせながら。
「……な、ナクト師匠ぅぅ……」
「うん、まあアレだ。なんていうか、周りが悪いと思う。コレは」
〝大丈夫〟という決意の時から短く、既に感情が決壊しかけているレナリアだった。
「あうぅ」と、レナリアがうるうると涙目でいた、その時――不意に、身なりの良い役人らしき男が通りかかり。
「ん？　あ……ウワアア《姫騎士》様が悲しんでおられるゥゥ!?　な、なぜ……ハッ!?　税か、税が高かったのか!?　ヒイイわかりました！　税を、税を暫く免除しますす！　私財を投じてでも、自ら野良仕事に繰り出してでも、免除してみせるゥ！」
「!?　ウオオオ！　特段、高いと感じてもなかった税が、なぜか免除されたぞォォ！」
「さすが尊くも貴き《姫騎士》様だ！　慈悲深い心で、いつも民衆を救ってくださるッ！」
「キャー！　レナリア様、ステキー！　メイドにして――っ！」
「レナリア様！」「《姫騎士》バンザーイ！」「祭りじゃア！」「ワッショォォォイ！」
なるほど、こうして勝手に伝説が生まれてしまう訳だ。
これでは重圧に潰されかけても、仕方ない――実際、レナリアは。

「ナクト師匠ぉ……なくとししょおぉ～～っ！」
なんかもう涙目どころか、さめざめと泣いている。
とはいえ、いちいちこんな騒ぎを起こしていては、キリがない。しょうがないな、とナクトは、レナリアへと歩み寄り。
「レナリア、また少し、我慢してくれ。……よっと」
「ししょぉ……う？　……きゃ、きゃあっ」
ぐっ、と彼女を抱き寄せる――と、そんな場面を見た民衆は、当然。
「は。……ハアアア!?《姫騎士》様にナニさらしとんじゃマント野郎テメぶっ潰されっぞコラァァァ――……あ、れ？」
だが、その罵倒は空を切る。ナクトとレナリアの姿は、一瞬で消えてしまったのだ。
「え、あれ……確かに今、《姫騎士》様と、妙なマント野郎が、ここに……あ、あれ？」
「き、消えちまった……一体、何が起こったんだ……？」
「……フッ、愚かな。そんなことも分からないとは、哀れな奴らだね……」
「!?　な、なんだと、どういうことだ!?」
何やら訳知り顔の男が、問いかけられると、自信満々に答えを返した。
「〝人類の希望〟たる我らが《姫騎士》だぞ――瞬間移動くらい、お手の物さ。一瞬で消

えたように見えたのも、当然だろう？」

「そ、そっか。……でもあの、マントの男は、何だったんだ……？」

「え……そんなん知らんし……オレ、今来たばっかだし……遺憾の意だし……」

「そっか、そっか……なんかオマエ、すげえムカつくな……」

……その場にざわめきだけを残し、すっかり姿を消してしまった、騒ぎの大元。

ただ――その場にいるレナリアは、ナクトに小声で尋ねた。

「……あ、あの、ナクト師匠……どうなっているのですか？」

そう、二人はその場から、一歩も動いていない。〝お互い以外は、周囲から見えなくなっている〟だけだ。その理由を、ナクトはあっさりと答えた。

「《世界連結（ワールド・リンク）》の能力で、世界に溶け込み、姿を隠したんだ――属性で言えば〝光〟かな。光の反射を捻（ね）じ曲げれば、こういうコトもできるぞ」

「そ、そうなのですか、そんな技術まで……こ、こんなにくっついているのは、少し、恥ずかしいですけれど……きゃっ」

ぽっ、と可憐（かれん）に頬を染めるレナリアは、下着姿で迫ってきたのと同一人物とは思えない。

まあそれはそれ、とにかく次の行き先を、ナクトは尋ねた。

「それで、これからどうするんだ？　城下町を抜けて、城へ向かうのか？」

「は、はいっ。私が正式に《魔軍》と戦うため、旅に出る許可を頂きに参ります。……その……お母様と、謁見をして。……っ」

「なるほど、レナリアのお母さんに会うのか。……ん？　レナリア、どうしたんだ？」

レナリアの表情は、魔物と対峙（たいじ）している時よりも、よほど緊張しているようだ。

いっそ、青ざめてさえいる彼女が、続けて震え声を放つ。

「ご、ごめんなさい、驚かせてしまって。母に会うのは、私にとって……戦いに臨むより、覚悟の要る事で。……で、ですがご安心ください、レナリアには考えがあります！」

どうにか気力を復活させたレナリアが、ぐっ、と握り拳を作った。

「その準備を整えるために――寄りたい場所が、あるのです。参りましょう、ナクト師匠。不肖レナリア、少しでもナクト師匠の領域へ近づくために……がんばりますっ！」

ふんす、と気合を入れるレナリアの案内に従い、ナクトはその場から移動した。

■■■

レナリアが寄りたいと言った場所、そこは、城下町でも最高級の〝装備〟を仕入れる店。

それも王室関係者ご用達（ようたし）の、超高級装備品店だった。

扉を開けたレナリアが、そういえば、と中断していた話を再開する。

「〝装備のランク〟の話ですが……《兵装クラス》の上、〝ランク3〟は《稀品クラス》と呼ばれます。ここまでくるとレアな部類で、易々とは手に入りません。それこそ、一部の……ここのように、特別なお店でしか、仕入れられないほどなのです」

話しながら、レナリアとナクトが店内に足を踏み入れると、程なくして上品な美しさを備える女店主が姿を見せる。

「まあっ。これは姫様……ご機嫌麗しく。ようこそ、おいでくださいました」

さすが、弁えているというべきか、先の民衆のように狂騒に陥る事はない。

高級品店だからか、客はレナリア達以外に見当たらないが、繁盛していない訳ではないだろう。店側が客を選べるほどのレベル、という訳だ。

その事は、毅然とした女店主の言動が、如実に表している。

「本日は、どのような御用向きでしょう？　お呼びつけ頂ければ、お城にまで伺いますのに……或いは何か、特別な事情でも、おありでしょうか？」

「ふふっ、お見通しですね……その通り。私は、新たなる力への手がかりを摑みました。その力を手に入れるための、準備として……ここで装備を、自ら見繕いたいのです」

「！　新たなる力……ですか。当店は確かに、城下町随一の装備店を自負しております。

されど今、姫様の身に着けておられる〝ドレスアーマー〟のような、《国宝クラス》と同等以上となれば……さすがに……」

「ご安心を。高いランクの装備が必要、という訳ではありません。私が求めるものは、もっと別の……それこそ、新たなる力、なのです」

「……なるほど、かしこまりましたわ。ご期待に添えるかどうかは、分かりかねますが……精一杯、努めさせて頂きます。準備いたしますので、暫しお待ちを……」

レナリアの只ならぬ雰囲気に、女店主も緊張気味に、店の奥へと消えていく。

一方、レナリアはナクトへと、補足の説明をしてくれた。

「説明が後になりましたが……〝ランク4〟に分類されるのが《国宝クラス》で、私が身に着けているドレスアーマーも、その類です。薄手に見えても、強力な結界で守られているおかげで、鋼鉄よりも守りが固く、炎や氷にも耐えられるのですよ♪」

なるほど、人が生きられぬほど瘴気の濃い《神々の死境》でレナリアが活動できたのも、その《国宝クラス》の〝ドレスアーマー〟が彼女を守っていたおかげだろう。

そしてもう一つの要因、頭のティアラを指しながら、レナリアは締めくくった。

「そして、最高位の〝ランク5〟が《神器クラス》――数えるほどしか世界に存在せず、おまけに使い手を自ら選ぶため、普通なら手に入れる事は限りなく不可能に近いです。私

の《光神の姫冠（リアライト・ティアラ）》が、まさにその《神器クラス》の一つ。……ご存じの通り、私にはまだまだ、使いこなせていませんが……必ず使えるように、なってみせます……！」

ぐっ、とレナリアが握った拳は、決意同様に力強く――ナクトは彼女の悲願成就（じょうじゅ）を祈りつつ、話をまとめた。

「つまり、下から順番に……《一般クラス（ランク1）》→《兵装クラス（ランク2）》→《稀品クラス（ランク3）》→《国宝クラス（ランク4）》→《神器クラス（ランク5）》、となるワケか。……ところでレナリア、その場合、俺の装備である《世界》は、どのクラスとランクになるんだ？」

「！　それは……レナリアにも、分かりません。〝世界を装備する〟なんて、あまりにも話が大きすぎて……少なくとも《神器クラス》かな、とは思うのですが……」

「そうなのか。……それじゃまあ保留で、《世界（ランク？）》としておくか」

「はいっ。けれど……ふふふっ、私はナクト師匠のおかげで、ヒントを得ました。このお店に来たのも……そのためなのですよっ♪」

ナクトに弟子入りしてから、テンションお高めのレナリアさん。弾んだ様子の彼女に、準備と覚悟が整ったらしい女店主が現れ、改めて声をかけてきた。

「お待たせ致しました、レナリア様――さあ、お申し付けくださいませ。《国宝クラス》

とは言わぬまでも、当店の誇りをかけて――貴女（あなた）様のお望みに、応えてみせます！」

「ふふっ、心強いですね……では、お願いします！　私が……私が求める装備は――！」

「は、はい！　天地を斬り裂く無双の宝剣でしょうか？　それとも攻撃を無効化する至宝の盾でしょうか？　総（すべ）てを貫く剛槍（ごうそう）、祝福されし神々の法衣（ほうえ）っ……!?　人類の希望たる《光冠の姫騎士（プリンセス・ナイト・ティアラ）》が求める装備とは――一体!?」

上品な女店主でさえ、その場の熱量に心昂（たかぶ）り、前のめりで問いかけてくると。

レナリアが、どこまでも真（ま）っ直（す）ぐ、堂々たる口調で求めた――その装備とは――！

「この店で、一番――布面積の少ない装備を、お願いしますっっっ‼」

「はは……っ！　かしこまり――……姫様？」

いやだわ、聞き違いかしら――そんな心の声が、女店主から聞こえる気がした。

そうだ、聞き違いだ。レナリアの言葉を、もっと良く聞いてみよう。そうしたら――

「露出が多ければ多いほど、良いです。遠慮は無用。レナリアは、新しい〝世界〟を開きました。さあ、惜しみなく曝（さら）け出させてください！」

「姫様!?　お気を確かに、姫様ーっ!?」

〝世界〟は残酷なほど正直で、聞き違いなんて、全くなかったらしい。

女店主の困惑は尤もだが、その後も目を輝かせて〝布面積の少ない装備〟を求め続けるレナリアへの対応に、苦労したようだった。

■■■

結局、店主が「もう堪忍してください……」と泣き（申し訳ない）、〝レナリアの求める装備〟は手に入らなかった――が、それどころではない状況になっている。

ナクトとレナリアが退店した直後、『城下町に《姫騎士》がいらっしゃった』という情報を元に現れた衛兵達に、囲まれたのだ。

連行、という訳ではない。〝人類の希望〟たる《姫騎士》の、出迎えという風情である。

ただ、レナリア当人の顔は、その時からずっと青ざめており。

夜を迎える頃、ナクト達は元々の目的地だった《光の聖城》へと入城する。暫く待たされてから通されたのは、絢爛豪華な女王の私室。

そして、跪くレナリアの前で、華々しい座具に腰かけているのは――

「っ……お、お母様。レナリア、ただいま……帰還、いたしました」

言葉通り、レナリアの母であり、《聖城クリスティア》を治める女王。

その若々しい風貌から〝二児の母とは信じられぬ〟と囁かれるほどの美貌は、娘たるレナリアにも受け継がれているものだろう。

けれど、その厳しい眼差しと声色は、レナリアとは似ても似つかない。はあ、とため息を吐いた女王は、入り口の扉を固める二人の女性近衛兵へと手をかざした。

「下がりなさい、貴女達。今から、《姫騎士》レナリアと、大切な話があるわ」

「……えっ？　し、しかし女王様、姫様はともかく……そこの、マントの……怪しいマントの男も一緒だというのに、危険では……！」

ナクトがこの場に同席する事を願い出たのは、レナリアだ。ナクトが一緒でなければ、城へは戻らない、とさえ言っていた。

しかし〝怪しい〟という近衛兵の危惧は、なかなか失礼だとは思うが、否定できないのも確か――けれど女王は、厳格な眼差しに鋭さを含め、冷徹な声を放つ。

「危険、と言ったかしら？　かつての《姫騎士》にして、光剣を振るい数多の魔物を討ち滅ぼし、当代の女王にまで昇りつめた――この私に、危険と？」

「……ひんっ!?　い、いいえ、何でもありません！　失礼いたします～っ!?」

女王に睨まれ、二人の近衛兵は泡を食って退室していく。

こうして、女王の私室に残ったのは三人だけとなったが――女王はナクトの存在など気にも留めず、レナリアに向けて厳しい言葉を与えた。

「さて、レナリア――貴女は先程、帰還、などと嘯いたわね？　黙って勝手な行動をとって、申し訳ございませんでした……の、間違いではないかしら？　しかも、そんな怪しいマントの男まで連れて……貴女一体、どういうつもりなの？」

その言葉は静かに、けれど明らかな怒気を孕んでいて、娘をますます萎縮させる。

それでもレナリアは、ナクトの事だけは弁解しようと、震え声で説明した。

「お、お待ちください、お母様！　彼は、私が兵士達に無理を言って、付き添って頂いたのですっ……彼は、私の未熟を、鍛えなおし……共に、戦ってくれるお方で……」

「レナリアの、未熟？　はあ……つまり彼は、知っているのね。《光冠の姫騎士》が、〝偽りの希望〟だ、と。レナリア、貴女……それがどれだけ重大な秘密か、忘れたの？」

母にして女王たる者の冷たい声に、レナリアは見て取れるほど身を竦ませている。

だがレナリアは、それでも辛うじて、青ざめた顔を上げて言葉を紡ぐ。

「お、お母様……レナリアへのお叱りは、甘んじて受けます。罰があれば、逃げはしません。ですが、今は人類存亡の危機……《魔軍（デモン・スウォード）》と戦わねばならぬ時のはずです！

どうか私に、レナリアに……旅立ちの許可を――」

「《魔軍》と、戦う？　何の冗談かしら。未熟で、《光神の姫冠》の力を、まるで引き出せない……〝偽りの希望〟である、貴女が？」

「うっ！　そ、それは……そのっ……」

人払いされたこの部屋には、ナクトとレナリア、そして女王の、三人しかいない。だからこそ、秘中の秘である〝偽りの希望〟の話も、大っぴらに口にできるのだろう。

ただナクトだけは、〝世界〟を通して気付いていた――女王が、座具の側部に備えている長剣に、意識を向けている事に。話が終われば、ナクトを斬って捨てるつもりだ。

一方、純真な性格のレナリアは、母がナクトへと放つ殺気には気付かず、震える声で食い下がっている。

「み、未熟なのは、誰よりも私が、理解しています……ですが、私は……一人では、ありません。かの《神々の死境》にて、私は……私の命を預けられる、偉大なる師匠に出会ったのですっ……ナクト師匠と共に……旅立ちたいのです！」

「……《神々の死境》、ですって？　あの〝危険領域〟に許可なく赴いた事も、罪だけれど……師匠？　そこのマントの彼の事を、言っているのかしら？」

レナリアの発言を受けた女王は、ふっ、と鼻で笑う。

「レナリア、貴女……自分の立場を、理解しているのかしら？　たとえ偽りとはいえ、貴女は人類の希望たる《姫騎士》なのよ？　それが、命を預けるなんて、二人で旅に出るだなんて……それはもはや、生涯の誓いと同義だと、分からないのかしら？」

ちなみにナクトには、よく分かっていない――が、言葉を受けたレナリアは。

「い、いいえ、それは分かっていますっ……ナクト師匠さえ良ければ、そのっ……誓っても、一向に構いません！　れ、レナリアは、この身を……捧げられます！」

（レナリア、そうか、なるほど……そこまでの覚悟で、俺と共に《魔軍》とやらと戦おうと。それなら俺も、全力で戦わないといけないな）

女王＆レナリアと、ナクトとの間に、見解の相違がある事に、両者は気付いていない。

そもそもレナリアの決意を聞いた女王は、小娘の戯言とばかりに吐き捨てた。

「話にならないわね。レナリア、そんなものは、一時の気の迷いよ。そんなもののために、《姫騎士》たる貴女を――たとえ偽りだとて、〝人々の希望〟として創り上げた虚像を壊すなんて、馬鹿げているのよ」

「こ、壊しは、しませんっ。私は〝偽りの希望〟ではなく、〝真実の希望〟になるのですっ……この《光神の姫冠》の力を、引き出せるようになって……」

「駄目ね――今の貴女は、《光神の姫冠》の力を、全盛期の私の半分ほども引き出せていない。《魔軍》を倒すには、《姫騎士》だった頃の私以上にティアラを使いこなせねば、到底不可能よ。……それともレナリア、貴女は、この母を超えられるのかしら？」

「！　そ、それは……私は、お母様を……超え、て……――っ！」

そこで母たる女王に一際強く睨みつけられ、レナリアは身を竦ませ、言葉を封じられてしまう。そんな娘を見た女王は、

「……聞こえないわね。そんな有様で、《光神の姫冠》の力を引き出せるはずがないわ。偽りのまま《魔軍》と戦い無駄死にするより、偽りでも希望として、人々の士気を高められる方が、ずっとマシよ。分かったわね、レナリア、もう――」

話は終わりだと、女王が会話を打ち切ろうとした――

――が、その前に。

「――そろそろ俺も、話していいか？」

「――――！　な、ナクト師匠……？」

跪いたまま見上げてくるレナリア、その真横に立つナクトが、女王と向かい合うと。

「あら……まさかこの私に、言いたい事でもあるというのかしら？　それは、勇気ではな

いわ、蛮勇というのよ。さっさと口をつぐんで――」
「まあそう邪険にせず、話くらいは聞いてくれないか？」
「はい。……は？　えっ……えっ？」
素直な肯定が、まさか自分の口から出たとは信じられない、女王。
対するナクトは肯定を一方的に受け取り、戸惑う女王へと言葉を投げかけた。
「要するに――たとえ今現在《魔軍》が迫っていようと、ティアラの力を引き出せていないレナリアでは、勝ち目がない。だから、無駄死にするくらいなら、城で大人しくジッとしていろ、と……そういうコトだな？」
「っ……え、ええ、そうよ。だったら何か、文句でも――！」
「いや、別に文句はない。女王さんの立場ってヤツを考えれば、その選択も仕方がないんだろうな、と思うよ」
「……えっ？」
ナクトの言葉が非難でなかったのが、心底意外だったのか、目を丸くする女王。
そういう驚き方は、やはり親子だな、とナクトは苦笑しつつ続ける。
「人類が滅亡しかねない脅威に対して、人々に希望を示さなければならず、同時に娘の……レナリアのコトだって、守ってやりたいんだよな。分かるよ。それがたとえ、〝偽り〟

という服を着るような話だろうと……そうだろう？」
「は、はい……あ、いえっ。その、私は……っ」
ナクトから与えられる言葉に、素直な反応を返してしまう、その事が女王には不可思議で、その胸中は戸惑いに満ちているようだった。
（ど、どうして、こんな怪しいマント男の言葉が……こんなにも、胸にすんなりと、落ちてくるの……？　この男の……か、彼の説得力は……何なの？）
厳格なる女王にさえ、有無を言わさぬナクトの説得力は、単に言葉だけの力ではない。
《世界連結（ワールド・リンク）》――《世界》を装備しているナクトの発言は、《世界》に溶け込み、想（おも）いが素直であればあるほど、まっすぐ相手に届くのだ。
仮にナクトの言葉に、感情に反する邪（よこしま）な意図があれば、今のような説得力はなくなる。
とはいえナクトが、そんな邪心を抱く事はありえない。裸の男は、素直なのだ。

とにかく、ナクトはその《世界》と溶け合う説得力で、女王に言い聞かせていた。
「でもな、女王さん。母だからとて、キミと娘は、同じ人間ではない。この《世界》には、何一つとして、全く同じものなど存在しない」

「！　あ、う……それ、は……っ」

「もう少しくらい、ちゃんと話を、聞いてあげてくれ。キミの娘は、キミが思っているより、ずっと気高く――ずっと、強い心を持っているぞ」

言い終えたナクトが、跪くレナリアに微笑みかけると――レナリアは瞳を潤ませながら、こくり、勢いよく頷いた。

「ナクト、師匠……ありがとう、ございます。レナリアは……レナリアは……ッ！」

まだ戸惑い続ける女王に、もはや震えの止まったレナリアが、改めて話しかける。

「お母様――いえ、女王様。どうか今一度、レナリアの話を、お聞きください」

「っ！　き……聞くまでもないわ！　いいから貴女は、黙っていなさ――」

「いいえ、黙りません！　かつて私など到底敵わないほど強く、真実の《姫騎士》だった女王様。貴女から見れば、私は力足らず、世間知らずの、弱々しい小娘でしょう。その事を、否定はできません。ですが私は、レナリアは――いつまでも、貴女の知る弱い女では、ないのです！　それを、今この瞬間――証明して見せます！」

今こそ見せる、〝偽り〟を〝真実〟に変える、鋼よりも固き意志。

レナリアが、その小さな手で力一杯、がっ、と己のドレスアーマーに手をかけて――！

「これが、レナリアの――覚悟ですっっっ‼」

ドレスアーマーを脱ぎ――！　……いそいそと、丁寧に折り畳み、横に置いてから。

つい育ちの良さが出ちゃったレナリアが、続けて敢行したのは。

そう――全裸土下座だ――！

……。

――全裸土下座だ――――!?（二度目）

己を師と慕う少女の、捨て身とさえ呼べる攻めの姿勢を見て、ナクトは思う。

（……なにゆえ？）

ちょっと師、弟子のこと、よくわかんない。

しかし相手は、あのあまりにも厳格な女王、そして母たる人間である。娘の行き過ぎた攻めの姿勢を目の当たりにし、一体、何を思うのか――

「……なるほど。この世界において、最も重要たる〝装備〟を投げ捨ててでも、戦いに赴

くという不退転の覚悟。更には裸となる事で、己の心身にやましき事がないと示し、同時に強い決意をも表した。レナリア……貴女、いつから……そんなにも強く……！」

どうも、前向きに受け入れてくれているらしい。

やはり意外と、似た者親子なのか……あるいはナクトの《世界》由来の説得力が、まだ効いているのかもしれない。

女王は感傷的な状態のまま、続けて己の心情を口にしていた。

「かつて《姫騎士》だった頃の私ほど、力を引き出せていないレナリアに……〝偽りの希望〟という服を着せてでも、《魔軍（デモン・スウォード）》との戦いから守ろうとしていたわ。けれど今、そう、服と共に〝偽り〟を脱ぎ去ったように……レナリアには、レナリアの道があるのよね」

もう鼻で笑うのではなく、ふっ、と穏やかに微笑んだ深読み女王が、華美な座具から立ち上がり、攻めっ攻めの姿勢を続けるレナリアに歩み寄る。

「レナリア、貴女の覚悟、よく分かりました。私は……母は、もう何も言いません。さあ、もう装備を身に着けなさい。貴女の大切な御師匠様に、笑われてしまいますよ」

「お母様……きゃっ、ナクト師匠！　み、見ちゃダメですよう……し、失礼しますっ」

ものすごく今更な気もするが、羞恥に頬を染めたレナリアが、慌ててドレスアーマーを拾い、装備しなおすべく備え付けの仕切りの向こうへ姿を隠す。

その間、女王は次にナクトへ歩み寄り、今では随分と優しくなった声で語りかけた。

「ナクトくん……で、良かったかしら。娘は見ての通り、まだまだ未熟だし、不束者ではあるけれど……あなたの事を、心の底から慕っているわ。あんなに厳しく言っておいて、こんな事を頼めた義理ではないのだけれど……でも、お願いよ」

それは、女王としてだけではない、母たる者の、娘を慈しむ言葉。

向かい合い、真っ直ぐに、彼女はナクトへと願った。

「ナクトくん、どうか、娘の事を――（生涯の伴侶として）守ってあげてね……！」

「ああ、もちろんだ――（仲間として）俺の命に代えても、守ってみせるぞ――！」

絶妙なすれ違いに気付かぬまま、ナクトが承知すると、女王は安堵の笑顔を見せた。

ちなみに、仕切りの向こう側で、着替えながら聞いていたレナリアはといえば。

「な、ナクト師匠、そこまでレナリアの事を……っ、ど、どうしてでしょう、こんなの初めてです……胸が、ドキドキしちゃってますっ……♡」

真っ赤になった頬に両手を添え、やん、やん、と身動ぎしていた。

何はともあれ、これでレナリアは――《魔軍》と戦うために、ナクトと共に旅立つ許可を、正式に得られた訳だ。

これにて、一件落着――……と言い切れない事態が、火急の報告として訪れる。

「じょ、女王様、《姫騎士》様――大変です！」

それは、先ほど逃げるように退室していった、近衛兵の一人。慌てる彼女に向けて、瞬く間に威儀を正した女王が、厳格な声で答える。

「騒々しいわよ。報告は粛々と、正確に行いなさい。客人の前で……いえ、未来の王たる御方の前で、失礼よ」

「も、申し訳ございませ……へ？　未来の、王？」

女王の言葉に、困惑する女衛兵……ちなみに、当人であるナクトはといえば。

（未来の王って、誰のコトだろう……あ、レナリアが将来、女王になるってコトか。娘のコト、ちゃんと認めてあげているんだな……うん、うん）

ナクトがそれで納得できるのなら、もうそれで良いのではないだろうか。

それはともかく、女王は改めて、女衛兵に問うた。

「それで一体、何があったの？　息を整え、落ち着いて、報告なさい」
「あ……はっ！　し、失礼いたしました！　コホンっ……すう」
深呼吸した女衛兵が、それでも落ち着ききれぬ様子で、改めて口にした報告は。
「北の要地、《水の神都アクアリア》がっ……《魔軍》の襲撃を受けていますっ！」
「……は？」
齎された報告は、威儀を正した女王でさえ、呆気に取られるほど意外だったらしい。
その理由は、戸惑いながらも重ねて問うた女王の言葉で、判明する。
「ど、どういう事なの……まだ《魔軍》は、遥か最果ての北の地で、人類の防衛戦力により食い止められているはず。重要拠点が陥落したという情報もなかったはずよ。なのになぜ、すぐ北の《水の神都》が、《魔軍》に襲われるというの⁉」
「わ、わわ、分かりませんっ！　《魔軍》は突然に現れたとか、何もない所から湧いてきた、とか……しかも少数ではなく、大軍で……もう伝達の指揮系統もメチャクチャで、他の詳しいことは、何もっ……！」
ありえないと、そう思い込んでいた所に、怒濤のように攻め寄せる状況。

この事態を前に、女王は後悔の表情を浮かべていた。
「甘かった……甘かったのは、私なのね……レナリアが人々の希望たる《姫騎士》として立つ限り、人類は絶望せず、戦い続けられるなんて……そんな考え自体、甘かったのだわ。そんな幻想は、こんな一手で、一瞬で消え失せる……私が判断を、誤った……！」
己を責める女王、つまりレナリアの母を――見かねたナクトが、一言。
「よし――じゃあ、すぐ助けに向かうか」
「！　な……ナクトくん？」
シンプルな話だ、と口にするナクトに、女王は戸惑いつつ危惧を述べる、が。
「そ、そんな……ここから《水の神都》まで、どれほどの距離があるのか、分かっているの？　どんなに急ごうと、とても間に合うはずが――！」
「お母様、大丈夫です。ナクト師匠と……ナクト師匠を信じる私を、信じてください」
「！　レナリア……えっ？　そ、その姿は……というか、その装備は？」
仕切りの向こうで着替えを終え、姿を現したレナリアの姿に、女王は驚く。
今のレナリアは、ドレスアーマーを着直した状態――ただし、少しだけ、違う。ドレス

アーマーの下を、補うように身に着けていたボディスーツを、着ていない。

つまり、今のレナリアは――へそ出し状態という事だ――！

（なにゆえ……なにゆえ？）

ナクトの疑問は尽きないが、どうやら女王も同じらしく――けれどレナリアは、何やら吹っ切れたような、自信に満ちた表情で言い放った。

「お母様。これもまた、レナリアの――覚悟です」

「！　そう……そうなのね。それが貴女の道、なのね」

もう、何も言わない――その言葉を思い出したように、女王はただ、頷いていた。ナクトとしては、もう少し踏み込んで言及してほしかったが。

一方、大胆な装備に踏み切ったレナリアは、早まる鼓動を抑えるように、片手を胸に当てながら考えていた。

（今のレナリアには、まだ、これが限界です……でも、これが私の、確かな一歩。少しでも、ナクト師匠に近づけるように。隣に立つ者として、恥のないように。そう――）

胸に当てた手を、ぐっ、と握りしめながら、己の固い決意を心中で叫ぶ――！

（後に《全裸王》と呼ばれる――ナクト師匠の伴侶に、相応しくなれるように――!!）

何だかナクトの知らない所で、とんでもない称号が付けられるのが確定していた。

〝世界〟を通して不穏な気配を感じるナクトだが、レナリアは何の邪気もなく笑う。

「ねっ、ナクト師匠っ♪」

「え？　あ、うん。北にある要地を救いに行く、って話だよな？」

「あ、そうですねっ。まずはそこから、始めましょう！」

ちょっとばかりのすれ違いはあれど、二人の見解は合致し、互いに頷き合う。

師匠と、弟子――次なる黄金の目的を、二人は真っ直ぐに見据えていた。

「さあ、行くぞ――《水の神都アクアリア》とやらを、救いに――！」

「――はいっ！」

続きは、10月17日発売のファンタジア文庫で！

©Youichi Hatsumi, Xe 2020